

2018年7月24日、早稲田大学ソーシャル&ヒューマン・キャピタル研究所は高知大学医療学系医学教育部門／医学部家庭医療学講座教授の阿波谷敏英先生をお招きして「地域医療」と題した講演会を開催しました。本講演は、日本の医療政策に関わる多くのステークホルダーの中から行政、患者、医師という各立場の方をお呼びする第3回目であり、医療経済学（担当教員：野口晴子）の履修者、本学の政治学研究科・公共経営専攻および経済学研究科の大学院生などが本講演に参加しました。



阿波谷先生は、医学部卒業後、高知県内の2つの病院勤務を経て、27歳にして、高知県梶原町立松原診療所長として赴任されました。それ以降、地域医療に従事しながら「地域包括ケアシステム」の構築と実践に尽力されています。

地域医療＝へき地医療と考えがちですが、本来あるべき医療とは、地域住民のさまざまな健康上の不安や悩みを受け止め、プライマリ・ケアから高次医療までの連携が切れ目なく地域の中にあり、一人一人の医師や医療機関が医療全体のことを考え、チームとして機能する事、都会であってもへき地であっても医療が社会インフラとなる事であり、それらの総称が地域医療であると説明いただきました。



阿波谷先生は四万十川の源流に位置する高知県梶原町で医師として勤務される中で、この地区が過去に無医地区になった事、高齢化が日本全体より早く進んでいた事から、高齢化社会には保健・医療・福祉一体となった「地域包括ケアシステム」の構築が必要不可欠であることをいち早く認識し、町立国民健康保険梶原病院と梶原町保健福祉支援センターの設立に尽力されました。これにより、以前は他機関へ搬送するしかなかった救急患者にも適切な診断と対応が可能となり、入院治療、高次医療機関との連携、リハビリテーション、訪問介護などの一連の流れができ、住民にとってより安心して暮らせる環境となり

ました。また病気予防の為の健康教室や予防接種の推奨などの地道な取り組みから、今では梶原町は長寿の里として知られるようになりました。

この「地域包括ケアシステム」とは、医療にとどまらず地域づくりに関することであり、地域で安心して暮らすためにどうすればいいのか、住民と共に考え創るものであると阿波谷先生は強調されました。そのためには、住民に寄り添い、共に生きる医師を増やすことも大事です。医療者は高度な医療が必要な病気になった場合に、治療の時にのみ患者と関わる、いわゆる横軸で対応するだけではなく、患者の生活や人生を見る視点、患者を取り巻く地域そのものを見る縦軸の視点を持つことも大切であるとおっしゃいました。

医療リソースの少ない地域で医療を継続するためのシステムについて、一人の医師の善意に依存するのではなく、日本全体で議論を深め考えていく必要があることを認識するきっかけを与えていただいた講演となりました。

